

藤丸遺跡Ⅱ

—集合住宅建設工事に伴う発掘調査概要—



平成17年12月

彦根市教育委員会

目 次

例言	
Ⅰ はじめに	1
Ⅱ 位置と環境	2
Ⅲ 発掘調査の成果	7
基本土層	7
検出遺構	7
出土遺物	12
Ⅳ おわりに	13
写真図版	

例 言

1. 本書は、彦根市教育委員会が平成16年度に集合住宅建設工事に伴って実施した、発掘調査の成果を納めたものである。
2. 本調査の調査地は、彦根市高宮町字藤丸766-1（一部）・767-1に位置する。
3. 本調査は、平成16年10月28日に試掘調査を実施したところ遺構を確認したため、同年12月8日～12月28日まで現地調査を実施し、平成17年4月21日～7月29日の間、資料整理を行った。
4. 本調査は、彦根市教育委員会文化財課が実施した。平成16年度・平成17年度の調査の体制は下記のとおりである。

【平成16年度】

課 長：花木 勉	課長補佐（兼文化財係長）：三浦 顕
副 主 幹：尾崎 洋	主 査：谷口 徹
主 任：水谷 千恵	主 任：志堂 昌賢
主 事：西村真理子	臨時職員：早川 圭

【平成17年度】

課 長：花木 勉	課長補佐（兼史跡整備係長）：尾崎 洋
主 査：北村 義仁	副主幹（兼文化財係長）：西田 哲雄
主 査：谷口 徹	主 任：水谷 千恵
主 任：志堂 昌賢	臨時職員：早川 圭

5. 本調査には以下の諸氏が参加した。田川智子（財団法人滋賀県文化財保護協会嘱託）、増田洋平（滋賀県立大学大学院生）、中居和志・神谷麻未・櫻田小百合・佐野絵梨香・菅納直人・杉原宏太・竹内真奈美・谷川真知子・東郷美香・中西千浪・中本洋平・野木直人（以上滋賀県立大学学生）
6. 本書は谷口と早川が執筆した。
7. 本書で使用した方位は、平面直角座標第IV系の座標北に、高さは東京湾平均海面に基づいている。
8. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会で保管している。

I はじめに

本書は、民間開発による集合住宅建設工事に伴って実施した藤丸遺跡（彦根市高宮町字藤丸766-1の一部・767-1所在）の発掘調査成果をまとめたものである。調査は、開発箇所について、平成16年10月28日に試掘調査を行ったところ遺構を確認したため、同年12月8日から12月27日まで本発掘調査を実施した。また、整理作業については翌平成17年度に行った。

調査にあたっては、土地所有者を始めとする関係者にご理解とご協力を賜った。厚くお礼を申し上げたい。



図1 藤丸遺跡位置図

II 位置と環境

〔地理的環境〕

藤丸遺跡は滋賀県彦根市高宮町・大堀町にまたがって所在する古墳時代から奈良時代の遺跡である。鈴鹿山系から流れる芹川・犬上川に挟まれた標高105~108mの微高地上に立地している。

遺跡の北方には、独立丘である鞍掛山（大堀山）と亀甲山（東山）が芹川の兩岸に並んでおり、芹川北岸の平地をはさんで霊仙山系の末端の丘陵が東方から正法寺町付近にのびて来ている。

遺跡の東・南方は、平地が広がり徐々に標高を高めながら多賀大社・敏満寺付近の青竜山の丘陵へ至っている。犬上川の南岸と北岸の一部には多賀町榑崎付近を扇頂とする犬上川扇状地が広がり、彦根市竹々鼻町から犬上郡豊郷町にかけての標高97~100m付近の扇端では多くの湧水池がみられる。

遺跡の西方は、芹川下流に兩壺山（平田山）丘陵があるほかは、琵琶湖岸まで沖積平野が広がっている。なお、芹川は現在兩壺山北方から直線的に琵琶湖へ流れているが、これは近世初頭に彦根城とその城下町建設にあたって付け替えられたもので、それ以前は現在の彦根市街の東側を北流して松原内湖へ注いでいたことが知られる。

このように藤丸遺跡は、犬上川・芹川の複合扇状地上に位置し、犬上川扇状地の扇端にある湧水池からは標高が高い、高乾な地に位置している。現在でも付近の水田は犬上川・芹川の上流に設けられた井堰からの引水によって潤されており、そのうち藤丸遺跡の範囲では芹川から用水が導かれている。

〔歴史的環境〕

藤丸遺跡の周辺には、今回の調査地の西北西約350m付近を古代東山道とそれをほぼ踏襲した、中世東海道、近世中山道が通過している。いずれも各時代における日本列島の東西を結ぶ大動脈であり、北方の大堀町・地藏町付近に古代鳥籠駅の推定地があり、南方の高宮町には中・近世の高宮宿があって、重要な中継点となっていた。

藤丸遺跡周辺における過去の発掘調査は少ないが、縄文時代では、東方に位置する土田遺跡（多賀町）で土器棺墓などからなる後・晩期の墓地が検出されている。また、北西に位置する福満遺跡でも後期を中心に前期~晩期の遺物が出土している。この他、犬上川の南岸に位置する小川原遺跡・金屋遺跡・北落遺跡（いずれも甲良町）でも後・晩期の遺物や配石遺構が検出されている。

弥生時代では、川瀬馬場遺跡や妙楽寺遺跡がある宇曾川流域に比べて、犬上川流域では前・中期の集落遺跡は少なく、竹々鼻廃寺遺跡で遺物が出土しているに留まる。後期に入ると住居や墳墓を伴った福満遺跡・堀南遺跡など遺跡が増加する傾向が見られる。これらの遺跡の

多くは扇状地より湖岸側に位置しており、先述の扇端部の湧水との関係が指摘できよう。

古墳時代には荒神山の山頂付近に前期末の大型前方後円墳である荒神山古墳が築かれる。この古墳は後の犬上・愛知郡城など湖東平野北部を代表する首長墓であり、後述する藤丸遺跡の集落とも前後する時期であり、おそらく集落から琵琶湖側への当時の景観の一面を形成していた。同じ時代の集落遺跡として、木曾遺跡(多賀町)・土田遺跡・品井戸遺跡・福満遺跡・堀南遺跡・横地遺跡・段ノ東遺跡がある。これらのうち藤丸遺跡より上流にあたる木曾遺跡や土田遺跡では庄内式～布留式期の遺構が確認されており、芹川扇状地の開発がこの頃には進んでいたことが伺えよう。なお、中・後期には正法寺古墳群・葛籠北遺跡・横地遺跡・神ノ木遺跡・段ノ東遺跡・鞍掛山にも古墳が営まれ、段ノ東遺跡や鞍掛山では埴輪が出土している。

古代に入ると藤丸遺跡の西方に白鳳寺院とみられる高宮廃寺(遊行塚遺跡)や竹ヶ鼻廃寺(恒河寺廃寺)が営まれ、藤丸遺跡の北東2kmの地点にある瓦陶兼窯である鳥籠山遺跡(正法寺瓦窯跡)からの瓦の供給が想定されている。また、大型の掘立柱建物群や硯・石帯といった官衙的な遺構・遺物が竹ヶ鼻廃寺・品井戸遺跡にみられる。これらのことから現在のJR南彦根駅周辺は、郡衙など犬上郡の中核施設が位置していた可能性が高い。

なお、藤丸遺跡周辺は古代の近江国犬上郡に属しているのは周知の通りである。郡の下部単位である郷は現在の高宮町付近に高宮郷、大堀町付近に駅家郷が比定されており、当遺跡はこれらいずれかの郷に含まれていたと考えられる。

壬申の乱(672年)の古戦場である鳥籠山は北方の鞍掛山に比定され、その周辺は東山道鳥籠駅の比定地にもなっている。東山道は鞍掛山と亀甲山との間を通過し、この地点で芹川を渡河したと思われる。古代東山道はここから湖東平野を一直線に、鳥籠駅の前駅である清水駅の比定地の清水鼻付近(東近江市)へのびているとされているが、その線上の尼子西遺跡(甲良町)で道路遺構が検出されていることは一連の想定を裏付けたものと言えよう。

さて、古代以降の藤丸遺跡周辺は、前述の通り古代東山道をほぼ踏襲した中世東山道・中山道が通過するものの、現在の集落以外は水田となっていたと考えられ、中世の遺構・遺物は確認できていない。東海道から多賀大社へのびる「多賀道」が分岐する高宮の集落では、集落中心部の東寄りにある高宮小学校・高宮幼稚園に高宮城跡があった。これは鎌倉～戦国期に当地を支配した土豪である高宮氏の居城で、過去の発掘調査によって城の周囲を囲んでいた堀の遺構や、天目茶碗・信楽擂鉢を確認している。また、高宮の北方の大堀にも大堀城跡の存在が推定されているが詳細は不明な点が多い。明治の地籍図を見る限りでも、これら高宮・大堀の集落の周辺にはほぼ一面に水田が広がっており、その中を中山道が直線的にのびる景観を呈していた。

今回の調査地も「上ヤケヤ」または「藤丸」という小字名があてられた水田で、標高約107mと藤丸遺跡内でも比較的高い位置にある。近年、遺跡のほぼ中央を縦断するように市道が建設されたのを期に、開発が著しい地域である。開発に伴う埋蔵文化財の試掘調査も、平成5

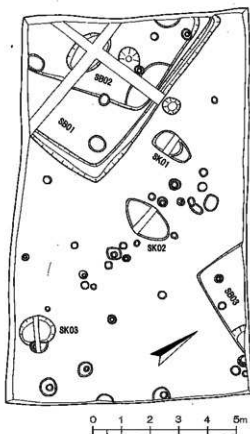


図2 平成5年度調査地遺構図

高い。おそらくこの微高地上に藤丸遺跡の主体が広がっていると考えて良いだろう。

ここで、平成5年度に実施した調査を振り返っておくことにしよう。平成5年度の調査地は、今回の調査地より北へおよそ100mの地所に位置している。調査面積はわずかに110㎡であるが、堅穴住居跡3棟のほか土坑や柱穴などの遺構と、かなりの遺物を検出している。出土遺物は土師器と須恵器で、大きく古墳時代前期と奈良時代に二分することができるよう

年度を皮切りに平成16年度末で20件を数える(表1)。その内、平成5年度の倉庫等建設工事と今回の調査の2件が、遺構を確認したため本発掘調査を実施している。本発掘調査はもちろんであるが、試掘調査であってもそこで得た土層のデータは、旧地形の復元とそれに基づく遺跡の広がりを把握する上で貴重な資料である。それらのデータを基に、平面図上に旧地形を復元したのが図3である。

当地一帯の現在の地形は、長いあいだ水田としての土地利用がなされてきたため地面の平滑化が著しい。ところが旧地形は図示のように低平地と微高地が複雑に織り成す変化に富んだ地形であった。微高地は灰褐色粘質土からなる安定した地山を形成しており、微高地と微高地の間の低平地には網状の流れが刻まれ砂礫が堆積していた。こうした旧地形を重ねながら、これまでに実施した2回の本発掘調査箇所を見ると、2箇所は同じ微高地上に存在する可能性が

(表1) 藤丸遺跡調査履歴一覧

調査番号	調査の別	調査の原因	調査地	開発面積(㎡)	調査主体	
1	平成5年10月27日 ～12月3日	発掘調査(試掘・本発掘)	倉庫等建設	高宮町宇松田755-1ほか	5,000	彦根市教育委員会
2	平成8年9月24日	発掘調査(試掘)	養蚕所新設	高宮町699-2ほか	1,498	彦根市教育委員会
3	平成9年10月2日	発掘調査(試掘)	工場建設	大塚町宇中瀬町385-1ほか	2,195	彦根市教育委員会
4	平成13年5月13日	発掘調査(試掘)	集合住宅	高宮町宇上青97-4ほか	328	彦根市教育委員会
5	平成13年7月3日	発掘調査(試掘)	工場建設	大塚町宇中瀬町389-1ほか	3,545	彦根市教育委員会
6	平成13年8月20日	発掘調査(試掘)	集合住宅	高宮町宇八反/切948-1ほか	882	彦根市教育委員会
7	平成14年5月22日	発掘調査(試掘)	集合住宅	高宮町宇湯の町976-1ほか	2,356	彦根市教育委員会
8	平成14年7月1日	発掘調査(試掘)	集合住宅	高宮町宇林田894-1ほか	1,907	彦根市教育委員会
9	平成14年7月5日	発掘調査(試掘)	集合住宅	高宮町宇藤丸772-1ほか	2,837	彦根市教育委員会
10	平成14年7月9日	発掘調査(試掘)	工場建設	高宮町宇八反/切946-1ほか	2,285	彦根市教育委員会
11	平成14年8月21日	発掘調査(試掘)	宅地造成	大塚町宇小塚498ほか	4,513	彦根市教育委員会
12	平成14年8月29日	発掘調査(試掘)	倉庫等建設	高宮町宇上六町798	1,118	彦根市教育委員会
13	平成14年8月29日	発掘調査(試掘)	集合住宅	高宮町宇北六/町925-1	1,100	彦根市教育委員会
14	平成14年8月29日	発掘調査(試掘)	集合住宅	高宮町宇藤丸771-1	1,323	彦根市教育委員会
15	平成14年12月11日	発掘調査(試掘)	工場建設	大塚町379-1	681	彦根市教育委員会
16	平成14年12月13日	発掘調査(試掘)	集合住宅	大塚町宇下瀬393-1ほか	1,038	彦根市教育委員会
17	平成15年9月16日	発掘調査(試掘)	集合住宅	高宮町894	966	彦根市教育委員会
18	平成16年10月16日	発掘調査(試掘)	ガソリン給油施設	高宮町900-6	2	彦根市教育委員会
19	平成16年12月8日 ～12月27日	発掘調査(試掘・本発掘)	集合住宅	高宮町宇藤丸766-1ほか	2,076	彦根市教育委員会
20	平成16年11月4日	発掘調査(試掘)	集合住宅	高宮町宇上六町785-1	1,066	彦根市教育委員会

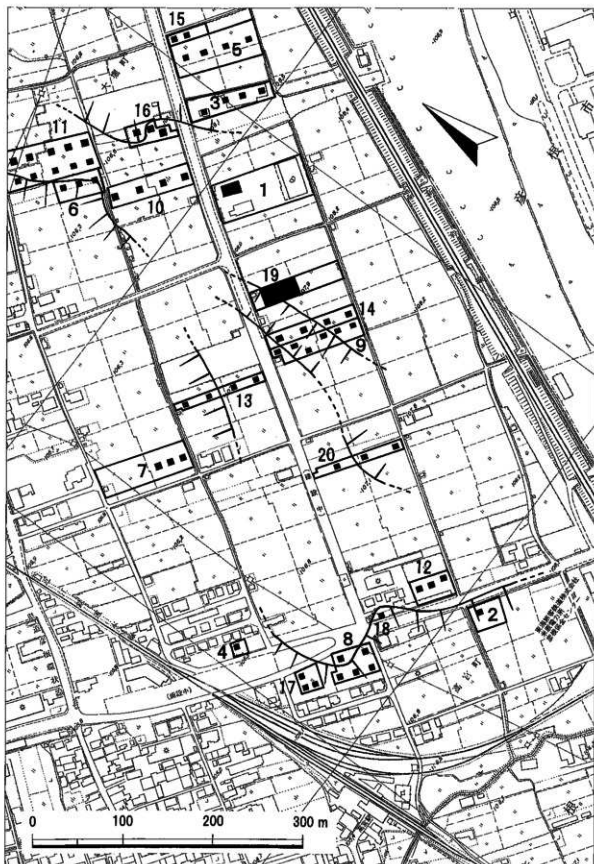


図3 藤丸遺跡本調査・試掘調査位置図
 (図中の番号は表1の番号)

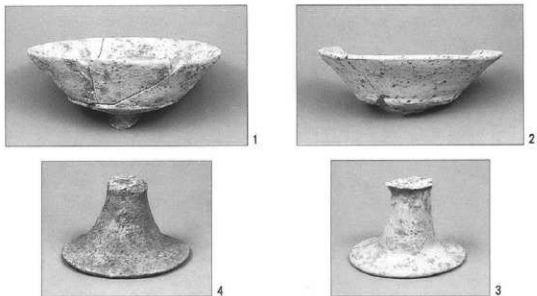


写真1 平成5年度調査地出土土器

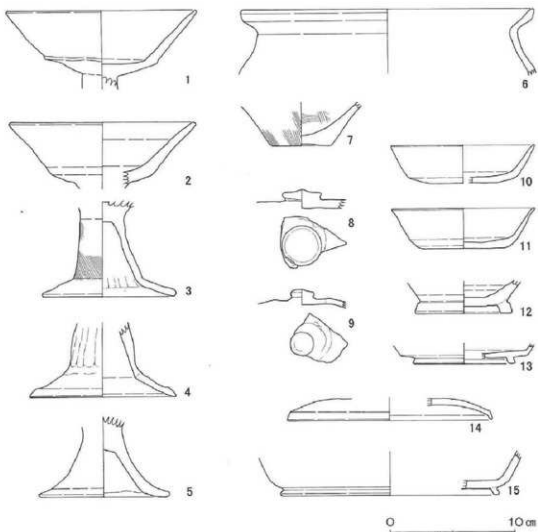


図4 平成5年度調査地出土土器実測図

だが、遺構から出土した遺物は少なく、土坑（図3のSK01）より古墳時代前期の土師器の高坏（写真1の2、図4の2）が出土しているほかは各遺構とも時期が判然としない。土師器の甕（6）や須恵器の坏身・坏蓋（8～15）など、多くの遺物は遺構面で採集したものである。

Ⅲ 発掘調査の成果

基本土層

調査地は、標高107m前後の水田である。水田の耕作土を除去すると、黄褐色の床土があり、次いで灰褐色粘質土の比較的安定した地山が広がっていた。ただトレンチの西端は、地山のレベルが下がるとともに砂礫の混入が見られるようになり、微高地の縁辺へと暫時移行している様子がうかがえた。この地山に到達するまでの深さはおよそ40cmであるが、地山の先端は酸化マンガンの沈着が著しくして遺構の確認が困難なため、さらに10cm程度掘り下げて遺構検出を行った。なお、試掘調査の際に行った開発域の南東隅における深掘りでは、地表下およそ120cmで、灰褐色粘質土層から青灰褐色粘土層に変化することが判明した。

検出遺構

開発区域の5箇所に試掘トレンチを設けて調査をした結果、トレンチの1箇所で柱穴を確認したため、遺構の広がりを追認する形で調査域を拡張した。その結果、開発区域の北西寄りのおよそ500㎡で遺構を確認し調査域とした。

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物などを構成する多数の柱穴と土坑である。柱穴の本体は直径が20～30cm、深さが20cm前後の小規模なもので、掘り方には方形と円形を両極に不定形な楕円を呈するものがある。埋土は掘り方が黒灰褐色粘質土、柱穴本体が黒褐色粘質土であるが、色調が近似しており、両者を明確に区別することができない場合もあった。これらの柱穴の中で、掘立柱建物と認知できたのはSB01～SB05の5棟であった。SB02では、建物に接して柵（SA01）が南に伸びている。土坑は小規模なSK01を1基検出した。以下、掘立柱建物と柵・土坑の順に個々に詳述する。

掘立柱建物（SB01）

調査区北西端近くで検出した掘立柱建物である。桁行2間×梁間1間の小規模な建物で、桁行東側の2柱穴は未検出。柱間は桁行が北から1.9m・1.9m、梁間が3.4mを測る。柱間は規則的であり、柱通りも良好である。建物の方位はN-11°-W。建物の柱穴本体は直径20cm前後で、掘り方は方形とも円形ともつかない不定形な形状を呈している。北西隅の柱穴P01より土師器の小片が出土した。

掘立柱建物（SB02）・柵（SA01）

調査区北東側で検出した掘立柱建物である。桁行2間×梁間1間、柱間は桁行が西側では

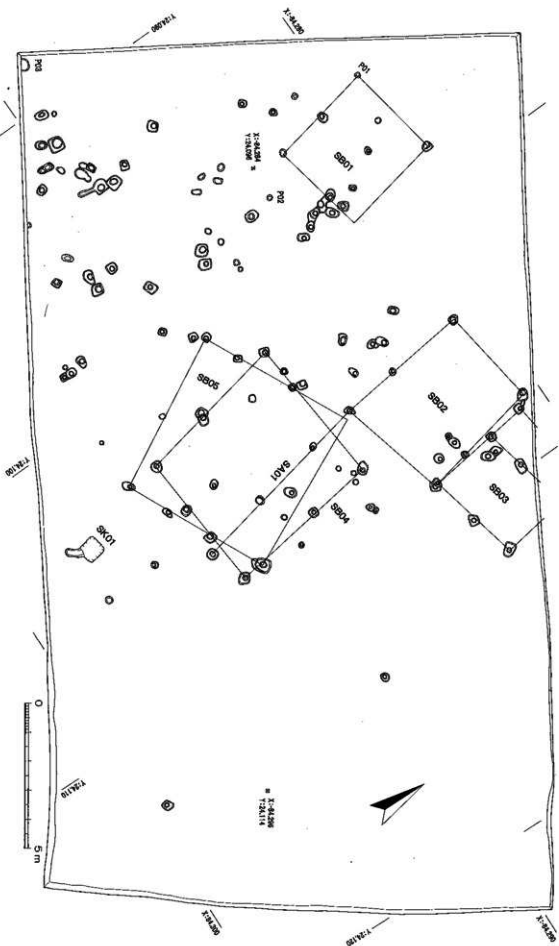


図5 遺構全図

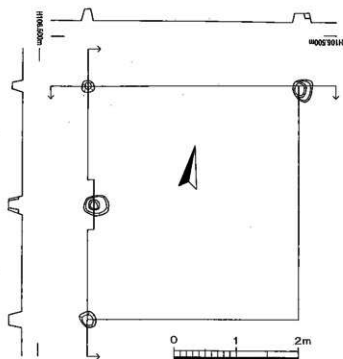


图6 掘立柱建物 (SB01)

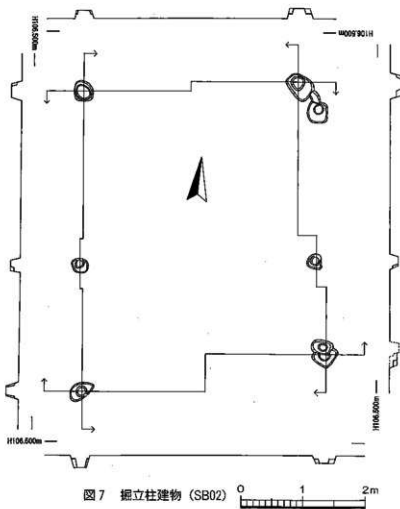


图7 掘立柱建物 (SB02)

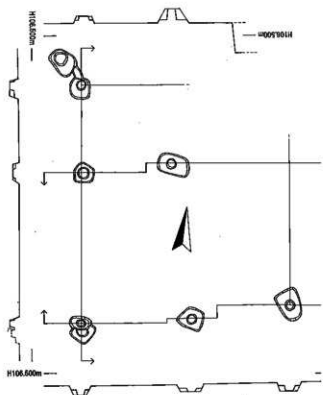


图8 掘立柱建物 (SB03)

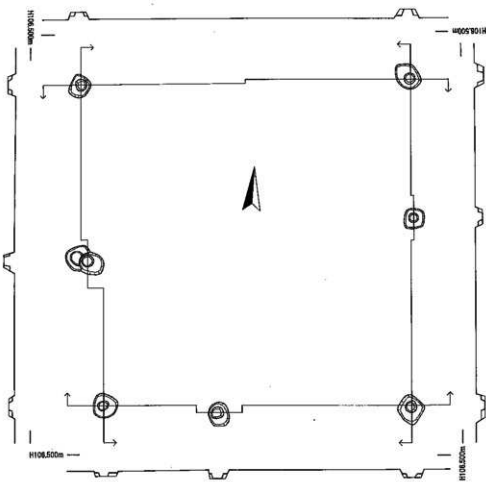


图9 掘立柱建物 (SB04)



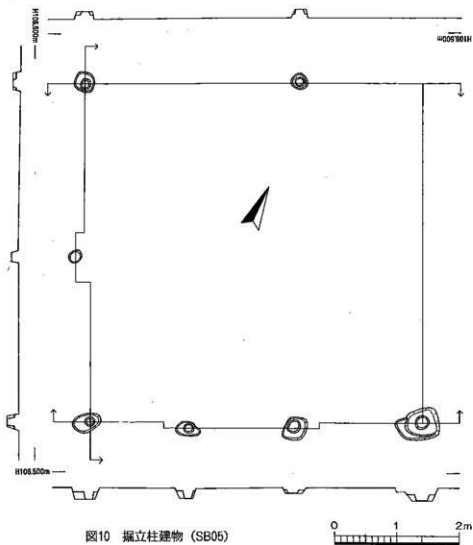


図10 掘立柱建物 (SB05)

北から2.8m・2.0m、東側で2.9m・1.5mと不揃いである。長い方の柱間の間には、さらに柱が入って桁行3間であった可能性も考えられる。なお、建物西側の桁行は、南西隅の柱穴からさらに南へ3穴の柱列が伸びている。建物に接して築かれた延長6.5mの櫓 (SA01) が想定される。一方、梁間も北側が3.4m、南側が3.9mと一定しない。柱通りはほぼ良好である。建物の方位はN-7°-W。建物の柱穴本体は直径15~20mで、掘り方は不定形な楕円を呈するものが多い。南東隅の柱穴は、次のSB03の柱穴と切り合い関係にあり、SB02がSB03より古いことが判明した。

掘立柱建物 (SB03)

SB02のすぐ東で検出した掘立柱建物である。建物の北東側は調査区外に伸びており、建物の全容は確認できていないが、桁行2間×梁間2間の小規模な建物が想定される。柱間は、桁行が北から1.4m・2.4m。梁間は西から1.8m・1.6mを測り、一定しない。特に桁行の柱間は、南側が北側のほぼ倍の距離である点が留意される。柱通りは比較的良好である。

なお、桁行中央の柱穴に対応する梁間の柱穴が、1.4mの距離を置いて存在する。建物の規模から考えると北面に庇の出る庇付建物の可能性は低く、むしろ建物空間を北と南に分ける間仕切柱であろう。建物の方位はN-7°-W。柱穴本体は直径20cm前後でほぼ一定している。掘り方は方形が意識されているが、おしなべて不定形である。南西隅柱は、既述のようにSB02の柱穴と切り合い関係にあり、SB03はSB02の解体後に築造された建物である。

掘立柱建物 (SB04)

調査区のほぼ中央で検出した掘立柱建物である。桁行2間×梁間2間と考えられる。柱間は、桁行が西側で北から2.8m・2.3m、東側で2.2m・3.0m。梁間は南側の西から1.8m・3.1m、北側は相応する柱穴を検出し得ていない。柱間はいずれも不揃いであり、柱通りも良好とは言い難い。建物の方位は、SB02・SB03と同じN-7°-Wである。柱穴本体は直径20cm前後、掘り方は隅丸長方形にほぼ統一されている。

掘立柱建物 (SB05)

調査区中央付近で、SB04と重複して検出した掘立柱建物である。北東隅柱とその南側の2柱穴、北側の1柱穴を確認していないが、桁行2間×梁間3間の建物が想定される。柱間は桁行の西側で北から3.6m・2.7m、東側は柱穴未確認。梁間は南側の西から1.6m・1.7m・2.1m、一方、北側は、西から2間分で4.1mである。柱間は一部不揃いが見られるが、柱通りは比較的良好である。建物の方位はN-26°-Wを測り、正南北方位に近いSB01～SB04より西に振れている。柱穴本体は直径20cm前後と変わらないが、隅柱の掘り方を相対的に大きくする傾向が認められる。掘り方のプランは方形と楕円形がある。

土坑 (SK01)

調査区南西側で検出した小さな土坑である。一辺70cmの隅丸方形プランを呈しており、南西隅からは幅30cmの溝が外に向かって伸びている。土坑の深さはおよそ20cmで、黒褐色粘質土が浅いレンズ状に堆積している。層内には炭化物片が多量に含まれていたが、土器等は確認できなかった。

以上、検出した遺構を個別に詳述した。想定した5棟の掘立柱建物は、いずれも桁行が2間で梁間が1間ないし2間、推定される柱も20cm前後の小規模なものであった。建物の方位は、SB05がN-26°-Wとやや西に傾いているが、SB01～SB04の各建物は、主軸がおおよそ南北に近い方位を示している。現存する当地の統一系地割はN-34°-Eであり、建物方位と条系地割の相違が留意されるところである。

出土遺物

今回出土した遺物は、遺構の主体が掘立柱建物であったことから、わずかに4点の小片に限られた。すべて土器器片であり、3点が柱穴内(P1～P3)から出土し、残る1点は遺構面から採集した。いずれも器種の判別も不可能な小片ばかりであり、時代を判定するまでに

は至らなかった。ただ、平成5年度の調査箇所で比較的豊富に出土した遺物から推測すると、奈良時代の遺構である可能性が高い。

IV おわりに

今回の調査により、奈良時代と推測される孤立柱建物5棟のほか、柵や土坑などを検出した。孤立柱建物はいずれも小規模な建物ではあったが、5棟の内4棟の建物の主軸が南北に近い方位を示していることが留意される。近年、当地のように南北地割分布地域以外でも、南北方位を意識した遺構の検出例が増加している。現存の統一条里地割が施行される以前に、それに先行する南北地割がかなり広範に普及していたことを物語るものであろう。彦根市域においても類例の増加が待たれるところである。

なお、今回の調査地は、西側が微高地の縁辺へと暫時移行していた。また、南東側では遺構が急激に減少していた。おそらく今回の調査地は、藤丸遺跡の全体から見ると遺跡の周辺に位置しているのであろう。そして遺跡の中心は当地と同じ微高地上のさらに北方、つまり「位置と環境」の項で付記した平成5年度の調査箇所辺りに広がっていると考えられる。平成5年度の調査箇所では、狭い調査区ながら遺構が密集しており、遺物の出土量も当地の比ではなかった。

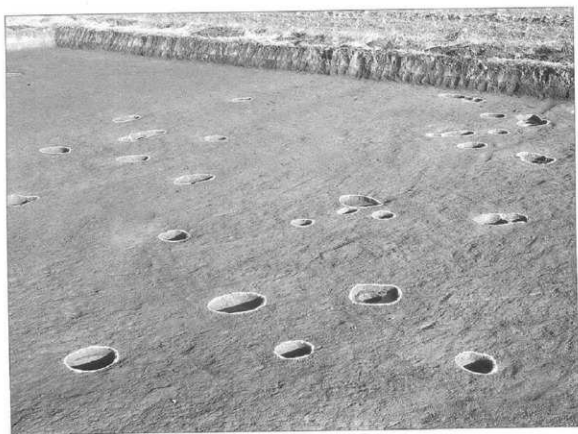
藤丸遺跡近在は、近年開発が著しい地区である。土地所有者や開発担当者の協力を得ながら、藤丸遺跡のさらなる解明と保存に努めたい。

(主要参考文献)

- 『高宮町史』高宮町史編纂委員会 1958
- 『滋賀県中世城郭分布調査5』滋賀県教育委員会 1987
- 『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会 1989
- 『彦根の古代寺院(一)』『研究紀要』第3号 彦根城博物館 1992
- 『鳥籠山遺跡発掘調査概要報告書』彦根市教育委員会1992
- 『尼子西遺跡2』滋賀県教育委員会・湖滋賀県文化財保護協会1998
- 『彦根 明治の古地図二』彦根市2002
- 『平成十三年度 滋賀県遺跡地図』滋賀県教育委員会2002
- 『土田遺跡-第10次調査-』多賀町教育委員会 2005



遺構全景 [北西から]



掘立柱建物(SB02)・柵(SA01) [南から]



掘立柱建物(SB03) [南から]



掘立柱建物(SB04)・掘立柱建物(SB05) [南から]



掘立柱建物(SB04)・掘立柱建物(SB05) [東から]



調査風景

報告書抄録

ふりがな	ふじまるいせき							
書名	藤丸遺跡Ⅱ							
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書 第37集							
編著者名	谷口 徹・早川 圭							
編集機関	彦根市教育委員会 文化財課							
所在地	彦根市尾末町1番38号							
発行年月日	平成17年(2005年)12月							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号					
藤丸遺跡	彦根市 高宮町 字藤丸 767-1 ほか	25202	041	35度 14分 24秒	136度 15分 54秒	540㎡	20041208 ～ 20050810	集合住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
藤丸遺跡	集落	奈良時代頃	掘立柱建物 櫓 土坑	土師器		掘立柱建物		

彦根市埋蔵文化財調査報告第37集

藤丸遺跡Ⅱ

—集合住宅建設工事に伴う発掘調査概要—

平成17年(2005年)12月発行

編集・発行：彦根市教育委員会文化財課

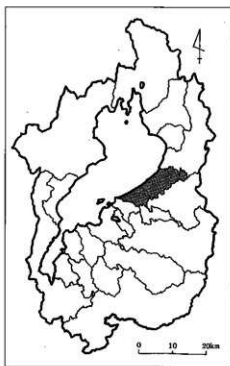
彦根市尾末町1番38号

TEL 0749-26-5833

印刷・製本：ニホン美術印刷株式会社

大垣市西外側町2-15

SITE OF FUJIMARU II



December, 2005

Hikone Educational Bureau
Cultural Asset Division